

音楽イベントを起点にした地域イノベーションの試み： 「油川ジャズフェスティバル」4年間の挑戦

野呂 拓生[※]

1. はじめに

筆者と筆者の研究室（青森公立大学地域みらい学科野呂ゼミ）では、2015年より青森県青森市の油川地域において、地域の人々とともに音楽イベント「油川ジャズフェスティバル」を作り上げてきた。それは単なる音楽イベントではない。多様な人々が集い、地域の新しい価値、可能性を見つけ提示することを通じて「地域が持続的に発展するためのイノベーション環境」が形成されていくことを目指したイベントである。本稿は、研究室が地域の人々とともに活動してきた4年間の取り組みについての報告である¹⁾。

2. 油川地域の概要

本取り組みの舞台は、青森県青森市の西に位置する油川地域（青森県青森市大字油川および大字羽白）である。新幹線駅「新青森駅」近傍に位置しており、北東側が陸奥湾に面し、北西側が丘陵地帯になっている。人口は平成27年国勢調査によると10,297人であり、65歳以上が28.6%、15～64歳が59.2%、15歳未満が12.2%である²⁾。

歴史は古く、青森市発祥の地といわれるほか、青森港開港以前の港、羽州街道・松前街道の合流点といった交通・交易の要衝であり、旧青森飛行場も立地していた。また、歴史的な文化遺産としては約100年前にイタリア人によって缶詰工場事務所として建設されたレンガ造りの「イタリア館」があったが、2018年に老朽化などの理由で取り壊されている。

地域活動は盛んである。多数の地域団体が存

在して油川市民センターなどで活発に活動している。また、地域づくりを担うまちづくり協議会も早い段階で設立され、歴史文化の発掘・整理、街歩きツアーなど、多様な活動が展開されている。創意工夫の凝らされた「かかし」が沿道を彩る「かかしロード280」も行われている。しかし、地域でのヒアリングからは、地域活動の担い手が固定化され、高齢化も進んでいるなどの課題が明らかになっている。

以上の背景を持つ油川地域において「油川ジャズフェスティバル」という新しい活動が2015年より始まった。

3. 油川ジャズフェスティバルの概要

「油川ジャズフェスティバル」は油川市民センターを会場に、2015年から学生（野呂ゼミ）と地域による協働プロジェクトとして進められ、第2回以降は多様な主体が参画する実行委員会によって運営されている。

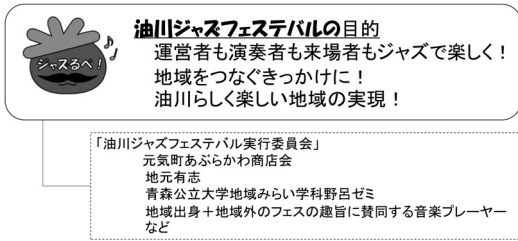
図1 フェスの様子



注：第2回の様子。撮影：油川ジャズフェスティバル実行委員会

[※] 青森公立大学准教授

図2 フェスの目的と運営体制



フェスの議論は2015年春、学生（野呂ゼミ、当時3年生）が油川でフィールドワークを行った際、元気町あぶらかわ商店会会長葛西清光氏からジャズイベント開催の相談を受けたことから始まった。商店会メンバーの家族に東京で活

動するジャズミュージシャン（ベーシストの三浦景星氏）がいたことからの打診であった。貴重なプロのジャズを聴くことのできる機会ということもあり、さっそく研究室として検討を進めた。ただ、地域の担い手が固定化・高齢化していること、およびほかにも多数のイベントが既に存在する地域であることもあり、単なる一過性のイベントではない、何らかの仕掛けを盛り込めないかと考えた。そのため、多くの人が参画し、皆が楽しめる地域の可能性を少しでも引き出せるフェスの提案を行った。その一環として、フェスに関連する事業も提案した。

以下、第1回の立ち上げから第4回までの概要を記す。

図3 フェスに関連する事業の例



注：写真は野呂ゼミ・油川ジャズフェステバル実行委員会

①第1回（2015年8月21日）

前述のとおり、研究室として提案したのは、単なる一過性のイベントではない、地域の可能性を引き出し、地域の多くの人々を巻き込み、皆が楽しめるフェスである。そのため、三浦景星氏の演奏に加え、地域の小学校、中学校、高校も同じステージに立つという多主体多世代参画型音楽イベントの開催を模索した。プロと子どもたちの共演という演出を通じて、子どもたちもこんな演奏ができるのだ、その演奏を引き出すプロの演奏はすごいなど、地域活動の「新し

い見え方」を伝える機会になると考えた。また、地域の誇りの醸成にもつながると考えた。幸いにして商店会をはじめとした地域の方々の協力のもと、各主体（小中高校）の理解が得られ、多主体多世代参画イベントとしてフェスを確立することができた。

あわせて、地域資源を再評価でき油川の魅力を再認識してもらうことなどを意図して「フェス飯」としての「ジャズ飯」も研究室より提案した。「ジャズ飯」とは前述のイタリア館を建設したファブリー氏によるトマト栽培とイワシな

どの缶詰製造・輸出の逸話に由来した「過去と現在、未来をつなぐ」をキーワードにした食であり、地域の飲食店がフェスのためにトマト・イワシに関連する飲食物を開発・提供する。これもまた、地域の協力を得ることができ、初年度から多数のジャズ飯がフェスを彩った。回を追うごとにジャズ飯は充実し、定番メニューも登場している。

第1回は検討や準備の時間も不十分なまま、手さぐりのように油川市民センターにて8月の開催にこぎつけたが、結果的に多主体多世代参画を実現でき、三浦景星氏らと高校生のセッションも実現し、小さな運営規模にもかかわらず300名を超える動員を実現できた。また、学生が実施したアンケートでの満足度は9割を超え、地域に若い力と躍動感が感じられたなどの好意的な意見や、継続開催を望む声が多く聞かれた。

ちなみに、当初は「フェスティバル」であった名称だが、当日の会場・資料標記が「フェステバル」となってしまった。しかし、結果的にそれが青森、油川らしい表現だと理解され、「油川ジャズフェステバル」が正式名称となっている。

②第2回（2016年8月19日）

第1回の成功を受け、持続的に運営し、かつ地域全体を巻き込んだ地域活性化イベントとすべく、地域の若手（以後の中心メンバーである金沢宗亨氏、伊藤朝太郎氏など）やゆかりのミュージシャンなどを巻き込んだ「油川ジャズフェステバル実行委員会」を組織した。そのうえで、地域の新しい魅力を構築し、持続的にフェスを育てていく目的から、改めてフェスのキーフレーズやマークを複数回の議論を経て策定した。これらの議論過程ではジャズのイメージと油川らしさを併せ持つ興味深い要素が次々に浮かび上がるとともに、地域や学生からの多種多様なマークの提案があった。最終的には実行委員の総意として「油川らしくみんなが楽しい」を表すキーフレーズ「ジャズるべ!」とマークが決定された（図4左）。また、本フェスの特徴であるフェス飯「ジャズ飯」についてもマークを作成し（図4右）、持続的に愛される象徴的な事業として推進していくことになった。なお、以上の過程では、

未来のあるべき姿から方向性等を策定する「未来アプローチ」（詳細は後述）を採用した。

図4 「フェス」および「ジャズ飯」のマーク



フェスのマーク（左）とジャズ飯のマーク（右）

あわせて、第1回よりも多彩な学生提案の関連事業をすすめた。例えば「新しい事柄がなにやら始まっているらしい」という雰囲気を作り上げ、人々の行動変容につなげようと意図したチラシ（文字だけのチラシを連続展開し、すべてが揃うとメッセージが浮かび上がり、フェスに足を運びたくなる仕掛け、図3左上）も開始した。また、映像、子どもたちを巻き込むワークショップ（おやさいクレヨンによるおえかき）、学生の司会、会場装飾、スタッフTシャツ、ゆるキャラの開発（図3左中）なども展開した。

なお、本フェスは持続的展開を目指すべく、民・地域による自立的運営体制の確立を意識しているが、第2回においては競争的資金（アートの音楽のあるまち青森文化芸術創造活動助成事業）も獲得している。

演目としては前半の子どもの部、後半の大人の部という2部構成により内容の充実を図った。その結果、500名以上の集客を実現し、会場の油川市民センターホールが熱気に包まれるとともに、アンケートでは9割超が満足と回答した。以後、第4回まで常に500名以上の集客と高い満足度を維持するイベントになった。また、油川地域以外からの集客も安定的に確保できるようになった。

③第3回（2017年8月19日）

第2回の成功で実行委員会による運営ノウハウはある程度確立されたが、さらに充実したイベントとして地域の魅力を高めるべく、学生提案による関連事業の充実を図った。なお、第3回は足達ゼミにも事業・運営面で協力していただ

いた。

フェスの雰囲気形成と「ジャズ飯」の魅力向上を目指し、学生提案により「屋台開発プロジェクト」を開始した（後の「油川式屋台」、図3右上）。懐かしくも目新しくデザイン性も高い屋台により、ジャズイベントにふさわしい雰囲気・印象の形成を図るとともに、気軽に訪れやすい販売形態を実現することで、多主体多世代がジャズ飯と音楽を媒介に交流しながら楽しめるイベントになると考えたのである。実行委員会メンバーでもあるDIY名人伊藤朝太郎氏と学生の協働により試作を進め、フェス本番での高校生・大学生のジャズ飯販売に活用した。なお、3回目にして初めて学生はジャズ飯（プリト）を開発・提供したが、好評のうちに完売することができた（図3左下）。

子どもたちが音楽に親しめるように、学生が企画してミュージシャンの協力を得て運営した段ボール製カホン（楽器）の製作・演奏ワークショップも展開された（図3右下）。子どもたちが自ら作り上げたカホンを用いてミュージシャンと共にジャズを奏でる姿は、誰もが楽しいフェスの精神「ジャズるべ！」を体現しており、大好評であった。

持続的なフェスの実行においては、資金問題は避けて通れない。第2回では競争的資金を獲得したが、毎回獲得できるとは限らない。フェス当初から商店会会長葛西氏の尽力により多様な資金調達が実現されてきたが、第3回からは安定的な運営を目指し、サポーター制度（寄付者には特製グッズを進呈）を開始した。進呈するグッズは、地域の実行委員メンバーによるステッカーと、学生が企画提案しプロのデザイナーの協力も得て作成されたレコードを模したドーナツタグであった（図3中段）。

④第4回（2018年8月25日）

実行委員会による運営は軌道に乗ったと判断し、前回以上にフェスと地域の魅力を高める関連事業を学生・地域の協働で積極的に展開した。屋台プロジェクトをより拡大し、DIY名人伊藤氏と学生の協働で屋台の台数を大幅に増加させ、ジャズ飯販売ブースを「油川式屋台」で埋め尽

くした。また、屋台は多様な使い方ができるのではないかと考え、楽器になる「油川式音楽屋台」、落書きを好きなだけでも良い「黒板屋台」、地域の歴史を反映した「イタリア館屋台」といった「コンセプト屋台」も展開した（図3右上、図5）。なお、これら屋台をお披露目すべく、テープカットを含む完成披露式典および学生による屋台と吹奏楽とのデモ演奏を挙行了した（図3右下）。

地域との協働は会場装飾でも実現した。これまで以上に地域の方々が直接参加できるプロジェクトとして、折り紙を使った装飾プロジェクト「ペーパーファン」も展開した（図3上中）。子どもからお年寄り、地域のアーティストまで、想定以上の多主体多世代の参加により美しく会場を彩ることができた。

また、学生デザインのサポーターグッズ（クリアファイル）も大好評だった（図3中央）。

図5 会場を彩る屋台



注：（左写真）左から「黒板屋台」「油川式音楽屋台」「イタリア館屋台」、（右写真）ジャズ飯用「油川式屋台」
撮影：油川ジャズフェステバル実行委員会

4. 地域活動のイノベーションとなるための考え方

(1) 未来アプローチの採用

前章で示したように、回を重ねるごとに内容が充実し、会場が人々の熱気で満ち溢れるようになった油川ジャズフェステバルであるが、その成功は綿密な思考や議論があったためだと自負している。本章ではフェスで採用した手法について簡単に記す。

地域活動に活気はあるが、担い手は固定化・高齢化の傾向にあり、活動の持続性について懸

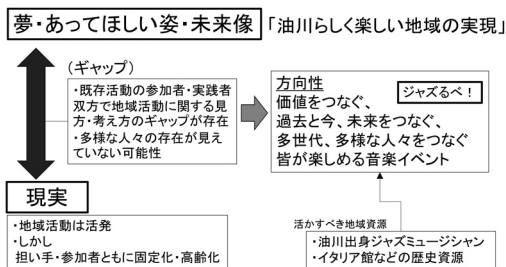
念があるという状況下での新しいイベントである。他方、すでに多様な活動が行われているため、新しいものを投入することは単に「大きな負担を自ら背負い込む」ことにつながり、地域活動の忌避や反発に拍車をかける可能性もある。また、他のイベントにジャズフェスが埋もれ、飽きられ、忘れ去られる可能性もある。

以上から、担い手・一般住民、多種多様な世代・立場にとっても「本当にすべてが新しい取り組みなのだ」「新しい油川につながるのかもしれない」という前向きな気持ちになり、かつ自然に参加したい、支えたいという自主・自立の視点の組み込みを意識することにした。それが将来的には地域の希望の実現につながると考えた³⁾。

以上を具現化するためには、課題解決型よりも、理想像に近づいていくアプローチが望ましいと考えた。第1回時点ですでに「多様な人々を巻き込み皆が楽しむ多主体多世代参加のイベント」という理想を掲げて進め、結果的にイベントは成功している。よって、第2回から新たに参加したメンバーも、その理想を共有する必要性があった。以上から「未来の視点（理想の状況）」を設定してから事業を進めるバックキャスト型型の思考と、伊丹（2015）が示すリアリスティックに夢を見て事業を推進するというイノベーション創出の手法、および筆者の研究成果を合わせた本プロジェクト独自の「未来アプローチ」を採用した。

手順を簡単に記すと、①「夢・あってほしい姿・未来像」を皆の意見を集約して定めて、②現時点とのギャップをリアリスティックに認識し、③ギャップを埋めるための方向性を見つける、という手法である。これにより「みんなが楽しい」を意味する「ジャズるべ！」を実現する事業展開の必要性が共有された。なお回を重ねるにつれて「未来アプローチ」にはPDCAサイクルや、試行的に事業を推進して改善点を即フィードバックしていくリーンスタートアップ的な手順を組み入れるなど改善が進められていった。

図6 未来アプローチによる方向性の提示例



注：伊丹（2015）とバックキャスト型の考え方に筆者の研究成果を合わせた思考法（未来アプローチ）を用いた方向性の提示例であり、実行委員会での議論を本稿のために再構成したもの。

未来アプローチにより明確になった「ジャズるべ！」を実現すべく、フェス本編（演奏）では「みんなが楽しい」「主体・世代間のつながり」が感じられる演目を追求し続けた。

(2) 地域への新しい視点と波及を意図した関連事業

未来アプローチにより必要な事業内容が明確になり、フェスの諸事業活動は、これまでになかった地域の見え方を示すことができるようになって考えられた。それはまさしく、山田（2016）で示されるところの新しい視点の提供（サーチライト）としてのイノベーション事業だと考えられた。

よって、改めて学生による関連事業を、地域の既存の見え方を覆して新しい見え方を提示していくサーチライト的な先導的役割として位置付けることにした。それは、これまでの地域にはなかった価値観を学生の視点で提供することで、既存の価値観と新しい価値観が重なり合い、摩擦を起こし、地域に刺激を与えることを意図するものである。すなわち中野（2017）や野呂（2018）で言及される「創造的な摩擦」を起こし、地域でイノベーションを連鎖的に起こそう、フェスを起点にスピルオーバー（当初の意図を超えて便益が拡大する漏出効果）も生起させイノベティブな環境を形成しようとしたのものである。新しい試みを厭わない地域は持続的に「楽しい」を創り続け、維持・発展できると考え、「誰でもここで挑戦していい」という文化の形成を願ったのである。

なお、フェス関連事業を進める際には、必ずすべての学生のアイデアは実行委員会に提示され、実行委員会の同意と協力を受けて展開するという手順を踏むことにした。委員会メンバーは地域の代表でもあることから、彼らの同意と協力を得て初めて地域に受け入れられやすい、過度な摩擦を起こさないサーチライトになり得ると考えたのである。当然、当初は反論も出るが、それを乗り越えることでブラッシュアップがなされ、「ジャズ飯」や「屋台」をはじめとした新しい価値が地域に受け入れられていくのである。

ちなみに、研究室ではすぐに実現できる現実的な事業に加え、学生の視点からの理想、すなわち次の段階のサーチライトとしてのビジネスプランを提示することを意識し続けてきた。その理想のプランは外部からの評価を得るようになり、学生対象のビジネスプランコンテスト（CVG東北）などでの入賞などを果たしている。

5. まとめ

地域は生活の場であるために、大きな変化よりも「今のまま」を望むことは当然だろう。しかし、社会環境の変容は、地域の在り方自体を静かに変えつつある。その点に対して、「こうすべきだ」と提言することは簡単だが、実行時には変化が好まれず、想定外の無数の困難を伴うおそれがある。だが、フェスを通じて明らかになったのは、「こんなこともやれるんだ」「楽しいね」「未来に近づいていけるんだね」という可能性が感じられる空気感の創出を意図すると、徐々に賛同は増え、想定以上の成果が見出せるということである。愛着と熱意を持った人々が暮らし集う地域であればあるほど、その成果は見出しやすい。それが4年間の活動で感じたことである。

未来を目指して誰もが可能性を追求できる。そんな理想を追求した研究室と地域の協働が、今後の油川地域の持続的発展にわずかでも貢献

できたのであれば、嬉しいことである。

(2018年11月30日受付、2019年1月10日受理)

(注)

- 1) 本稿は2017年6月25日開催の生活経済学会第33回研究大会（於 東北福祉大学ステーションキャンパス）での報告を基に、後の活動成果を加えて記述している。また、本活動は、フェス実行委員会メンバーをはじめ、地域内外の多くの皆様の協力があったのもであった。以上に関係するすべての皆様に深く感謝申し上げます。そのほか、熱意と能力あふれる研究室メンバーの力は言うまでもない。また、資料整理を担ってくれた藤川日菜子氏にも感謝申し上げます。なお、本文記載のとおり「フェステバル」が正式名称である。
- 2) 人口総数は年齢不詳を含み、比率は年齢不詳を除いて算出。
- 3) フェス立ち上げに関与した学生は、初期の内情を詳しく記した卒業論文（工藤2017）で、フェスを「油川の希望づくり」と表現している。

(参考文献)

- ・伊丹敬之（2015）『先生、イノベーションって何ですか？』, PHP研究所
- ・企画集団ぶりずむ（2017.2.1）『隔月刊あおもり草子 青森市発祥の地油川』, 通巻242号
- ・工藤ももな（2017）「地域の希望をつくる 過去と未来をつなげる実践研究—油川ジャズフェステバルを舞台として—」, 青森公立大学地域みらい学科卒業研究
- ・中野勉（2017）『ソーシャル・ネットワークとイノベーション戦略 組織からコミュニティのデザインへ』, 有斐閣
- ・野呂拓生（2018）『地域における事業創出とその後の持続的展開に関する調査研究プロジェクト報告書』, 2017年度青森公立大学地域研究センタープロジェクト事業
- ・山田壮夫（2016）『コンセプトのつくり方』, 朝日新聞出版
- ・油川ジャズフェステバル実行委員会会議資料